

詩篇61-65篇 「遠くからの祈りと賛美」

1A 及びがたいほど高い岩 61

1B 地の果てからの祈り 1-4

2B 王の永久の統治 5-8

2A 黙って待ち望む祈り 62

1B ぐらつく敵 1-4

2B 神にかかっている救い 5-8

3B 報いられる神 9-12

3A 荒野を聖所にする賛美 63

1B 命にもまさる神の恵み 1-8

2B 命を求める者の滅び 9-11

4A 心に矢を放つ者 64

1B 内なる企み 1-6

2B 戻ってくる矢 7-10

5A 建てられる神の国 65

1B 聖なる所にある良き物 1-4

2B 地の果てまで広がる御力 5-8

3B 恵みの耕作 9-13

本文

詩篇 61 篇を開いてください。私たちは午前礼拝で、この詩篇の背景がアブシャロムから逃げている、エルサレムから遠く引き離されたダビデの祈りであることを学びました。おそらく61 篇だけでなくその後も、同じあるいは似たような背景の詩篇になっています。聖所から遠く離れているところでも、その場所でダビデが祈りを捧げ、賛美を捧げています。「遠くにいても、そこに主がおられる」という信仰について学びます。

1A 及びがたいほど高い岩 61

1B 地の果てからの祈り 1-4

61 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデによる 61:1 神よ。私の叫びを聞き、私の祈りを心に留めてください。61:2 私の心が衰え果てる時、私は地の果てから、あなたに呼びわります。どうか、私の及びがたいほど高い岩の上に、私を導いてください。61:3 まことに、あなたは私の避け所、敵に対して強いやぐらです。61:4 私は、あなたの幕屋に、いつまでも住み、御翼の陰に、身を避けたいのです。セラ

私たちの周りには、悪がはびこっています。その悪によって、ダビデのように外に追いやられる

ような思いになります。その悪に圧倒されそうになる時に、このダビデの祈りがあります。午前礼拝をお聞きください。その悪があっても、なおのこと勝利する私たちの岩、キリストがおられます。使徒ヨハネが第一の手紙をこのように終えています。「私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。(1ヨハネ 5:19-20)」たとえ悪があっても、それでも御子イエス・キリストがおられる。その御子を見つけ、私たちは礼拝をささげます。ダビデがここで、「私は、あなたの幕屋に、いつまでも住み、御翼の陰に、身を避けたいのです。」と言っているとおりです。

ところで注解書を見ますと、「御翼の陰」というのは、聖所の奥、至聖所にある贖いの蓋のケルビムの翼という解釈があります。興味深いですね、主はケルビムの間から語ると言われました。主の御座をそこは表しています。主が、私たちをご自分の住まいの中に、その御座そのものの中で身を避けたいという祈りです。

2B 王の永久の統治 5-8

61:5 まことに、神よ。あなたは私の誓いを聞き入れ、御名を恐れる者の受け継ぐ地を私に下さいました。61:6 どうか王のいのちを延ばし、その齢を代々に至らせてください。61:7 彼が、神の御前で、いつまでも王座に着いているようにしてください。恵みとまこととを彼に授け、彼を保つようにしてください。61:8 こうして、私は、あなたの御名を、とこしえまでもほめ歌い、私の誓いを日ごとに果たしましょう。

ダビデは、祈りの中で神の国の幻を回復しています。ここにあるダビデの祈りは、神が彼に約束してくださった永遠の御国の約束です。「2サムエル 7:12-16 あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」ダビデは荒野の中にも、主の与えられたこの約束を御霊によって思い起こして、そしてその約束に従って願いをささげました。

そして、彼の祈りは聞かれます。祈りは、荒野に逃げて心が衰え果てていた時に、及びがたいほど高い岩の上に導いてくださいというものでしたが、アブシャロムがエルサレムで王座を占めていたのに、後に彼はエルサレムに戻り、再び王座に着くことができたのです。そして王の任務を果たすことができました。そして後に自分の子ソロモンが王となるのを見届けることができ、そして後に

永遠の御国の王となるキリストがお生まれになるのです。その恵みをダビデは感謝して、誓いを果たしています。その誓いとは、主の家の中に入って行くことです。そして、そこで主を日毎にほめたたえていることです。「私の誓いを日ごとに果たしましょう。」とダビデは言っています。

私たちはとかく、祈りを主が聞いてくださっているのに、それだけで終わっていることが多いです。主がこれだけのことをしてくださった、だから喜んで、私たちは自分自身を主に捧げ、主にお仕えるのです。ルカによる福音書に記されている、十人のらい病人の話がそれを如実に表しています(17:11-19)。イエス様に直してくださるようお願いして、イエス様は直してくださったのですが、引き返して主を礼拝したのはただ一人で、しかもサマリア人でした。もし私たちが、神から恵みをいただき続けて、その感謝を忘れていたら、その心はむしろ高慢になって、パリサイ人たちのようになってしまうのではないのでしょうか？そのルカによる福音書の箇所後に、神の国はいつくるのかと、目の前にメシヤがおられるのにいつまでも満足しない姿が書かれています。「恵みと礼拝」、あるいは「神の祝福と献身」は、引き離して考えてはいけないものです。

2A 黙って待ち望む祈り 62

1B ぐらつく敵 1-4

62 指揮者のために。エドトンによって。ダビデの賛歌 62:1 私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。62:2 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。62:3 おまえたちは、いつまでひとりの人を襲うのか。おまえたちはこぞって打ち殺そうとしている。あたかも、傾いた城壁か、ぐらつく石垣のように。62:4 まことに、彼らは彼を高い地位から突き落とそうとたくらんでいる。彼らは偽りを好み、口では祝福し、心の中ではのろう。セラ

この詩篇も、おそらくアブシャロムたちがエルサレムに入っている時のものではないか、と言われています。アブシャロムがどのようにしてダビデを打ち倒すのかを議論している時に、ダビデの議官であったアヒトフェルは、どのようにしてダビデを追って、殺せばよいかを議論していました。その様子をダビデは語っています。彼らはダビデのことを、「傾いた城壁か、ぐらつく石垣」と思っているようです。けれども、ダビデは、自分自身は、神に身を隠しているのだ、だからゆるがされないと言っています。2 節に、「神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。」と言っています。この信仰告白を、6 節でも繰り返しています。

ここで大事な言葉は、1 節です。「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。」ここの言葉はもっと文字通りに訳すと、「ただ神に向かって沈黙する、私の魂は」となっています。主の中であって、自分の魂を休ませるという強い意志の表れです。

2B 神にかかっている救い 5-8

62:5 私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。62:6 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。62:7 私の救いと、私の栄光は、神

にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。

ダビデは同じ言葉を繰り返しています。主に向かって、黙っています。なぜなら、自分で何とかしなければと思って動いてしまわないように、自制しているからです。自分で自分を救おうとするのではなく、神こそが自分を守る岩であり、神こそが救いであることをじっと待っている姿です。そこにいる時に私たちは安息を得ていますが、人は意外にも安息よりも自分で動くことを選び取ります。

ユダの民がその過ちを犯しました。ヒゼキヤの時代に、アッシリヤに攻められている時に主を待たないで、エジプトに助けを呼びに行ってしまったのです。そのためにかえって、アッシリヤに弱みを見せることになり、戦況は悪化しました。「イザヤ 30:15-17 神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。ひとりのおどしによって千人が逃げ、五人のおどしによってあなたがたが逃げ、ついに、山の頂の旗ざお、丘の上の旗ぐらいしか残るまい。」けれども、エルサレムがアッシリヤに包囲された時に、ヒゼキヤは主の宮に行ってその苦しみの思いを注ぎ出した時に、主が助けてくださったのです。今の箇所の続きにこう書いてあります。「30:18 それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。」

62:8 民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。セラ

ダビデは、民に向かって自分と同じように神に信頼するように励ましています。そして大事な言葉を言っていますね、「あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ」です。沈黙して、主を待ち望むというのは、何も主に対して黙っていることではありません。その反対で、自分のしたいことを抑えて、ただ主に対してのみその心を注ぎ出すことであります。今、話したように、ヒゼキヤ王はアッシリヤの王から受け取った脅しの手紙を、なんと主の宮の中でそのまま差し出して、そしてその呻きと嘆きを神に聞いていただいたのです。私はかつて、ある人から相談を受けたことがありました。手紙を受け取ったのですが脅迫の文面でした。その人がクリスチャンであることを知っていて、聖書の言葉を使って、いかにその教えに背いているかを責め立てているものでした。私は、ヒゼキヤのしたことを思い出して、その手紙をテーブルの上に開いて、そして主の前で祈り始めたのです。

私たちは、なかなか自分の苦しい思いを言葉で言い表すことに困難を覚えます。人にはなかなか分かってもらえない、いやおそらく全く分からないであろう苦しみもあります。ですが、主は聞いてくださるのです。聖霊が助けてくださいます。「ローマ 8:26-27 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、

言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」

3B 報いられる神 9-12

62:9 まことに、身分の低い人々は、むなしく、高い人々は、偽りだ。はかりにかけると、彼らは上に上がる。彼らを合わせても、息より軽い。62:10 圧制にたよるな。略奪にむなしい望みをかけるな。富がふえても、それに心を留めるな。62:11 神は、一度告げられた。二度、私はそれを聞いた。力は、神のものであることを。62:12 主よ。恵みも、あなたのもので。あなたは、そのしわざに応じて、人に報いられます。

ダビデは、困難な時にその助けを人に求めることに対する戒めを語っています。私たちは、相対的に物事を見えています。身分の低い人がいて、そして高い人がいます。それを天秤にかけて、身分の高い人のところに行けば力があるはずだと思います。けれども、いつも私たちは神と人とを天秤にかけなければいけません。力と富を持っていると思われる人たちを全て秤にかけても、神ひとりだけで、彼らは息のように、いや息よりも軽いのです。

そして、そのような困難な時に私たちは、「力と富だけが頼りだ」という誘惑がきます。世においては、自分を救い出すためにこの二つを持っていることは大きな武器です。けれども、ダビデは圧政に頼るな、略奪に空しい期待をかけるな、富が増えても心に留めるなと戒めているのです。しかし、ダビデは何度も何度も神から聞いていました。「一度告げられた、二度」という言い回しは、一度ならず二度という日本語の言いまわしに似ていて、確かに神が語っておられることを強調しているのです。ダビデは、霊的に成熟した信仰者として、これまで主に何度となく語られた言葉として紹介しています。それは、「力は、神のものであることを。」ということです。

そしてダビデは、力だけを強調していたのですが、ダビデにとって、数々の彼による詩篇を見ると、彼にとって恵みが神のご性質の中で最高のものとして捉えています。神が一方向的に自分に好意を寄せてくださることです。自分を愛し、単に決められたこと以上に真実を尽くしてくださることを意味しています。そして、信仰によって主を耐え忍んで待ち望めば、必ずその信仰に対する報いも与えられることを教えています。

3A 荒野を聖所にする賛美 63

1B 命にもまさる神の恵み 1-8

63:1 神よ。あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渇き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。63:2 私は、あなたの方と栄光を見るために、こうして聖所で、あなたを仰ぎ見えています。

再び、ダビデはアブシャロムから逃げている時にこの詩篇を書いています。水のない、荒野の衰え果てた地というのは、ユダの荒野のことです。彼は61篇で、「心が衰え果てる」と言っていました。ダビデはここでも二重の意味で使っています。文字通り衰え果てた土地でありますし、エルサレムにおいて神を礼拝できない、その心の状態も言い表しています。そして、すごい言葉が書いてあります。「私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。」気を失うほど、主なる神を慕っていました。それだけ彼は神を慕い求めていたのです。その激しさはとても大きかったのです。そしてその祈りに、主は答えてくださいました。2節の聖所で神を仰ぎ見ているという言葉は、まだ荒野にいる時に行った言葉です。エルサレムから遠く離れているのに、ダビデはその制限の中で神を慕い求めたので、その祈り願いに神は答えてくださったのです。「求めなさい、そうすれば与えられる。」とイエス様が言われたとおりです。

この言葉を取り上げて、「私たちはどこでも礼拝できる。わざわざ教会に行かなければいけないでもないではないか。」という人がいたら、ここの御言葉を正反対に読んでいます。自分に与えられている時間、能力、健康、財産、これらのものをすべて費やしても、私は他の兄弟たちと共に主を礼拝したいと思うのです。

中国においては、家の教会において礼拝時間が三時間というのはざらにあります。今でこそ中国は便利になりましたから、なぜそんなに長いのか？と思いますが、その伝統は迫害がひどい時に始まりました。聖書もろくろくない、そして交通機関も発達していません。何時間もかけて徒歩で教会まで来て、それで三十分の説教ならば、「どうしてだ！」という不満が出てくるのです。その時にしか得ることのできない御言葉を得たいという強烈な飢え渴きがあるので、牧者はたくさんその時にみことばを分かち合わなければいけない、そうした御霊の流れがあるのです。

そのように、どんなことがあっても何時間かけても御言葉を聞きたい、そして愛する兄弟姉妹と交わり、共に礼拝する中に聖霊が臨在されるのを信じてそのようにやって来ます。それでも来ることのできない人々があります。そのような時に、その激しい飢え渴きと願い求めに、主は答えてくださり、その場を聖所としてくださるのです。水野源三さんという、口しか動かすことのできない障害を持っている兄弟がいました。彼は動けなくなった時に、彼の病床が礼拝場となりました。なぜなら、神が彼のところに多くの、牧師やその他のクリスチャンを遣わしてくださったからです。

そして再び中国の教会の話に戻しますと、かつては教会の指導者が労働改造所というところに送り込まれたことがあります。キリスト教のような危険思想を持っている者たちは、そこで思想教育をするという目的のために造られました。そこに、ある教会の指導者が入っている時に、看守は彼を肥溜めで働かせました。六万人の囚人の排泄物がそこに集められるのですが、畑の肥料にするために掻き集めなければいけません。その悪臭はもちろん強烈でした。しかし、彼はそこが最もすばらしい礼拝所となっていたのです。なぜなら、臭いので看守の目が届かなかったからです。彼はそこではどんなに大きな声を出して賛美しても、誰にも止められません。さらに、彼は覚えて

いる聖書の言葉をそこで讀んじました。彼の歌った賛美には、讚美歌でこんなものがあります。「私は園に独りで来る、まだバラの花には朝露がある時に…」この歌詞は、きれいな庭園を思い出させるものですが、彼は肥溜でそれを歌い、その場所が園になったというのです。¹

63:3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私のくちびるは、あなたを賛美します。63:4 それゆえ私は生きていくかぎり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります。63:5 私のたましいが脂肪と髓に満ち足りるかのように、私のくちびるは喜びにあふれて賛美します。

ダビデの甘く、豊かな賛美をここで見ることができます。神の恵みは天のように高いと何度となく言っていますが、ここでも恵みを取り上げています。そしてすばらしいのが、それが「命にも優る」ということです。いかがでしょうか、私たちは神の恵みが自分の命よりも勝るとお考えでしょうか？水野源三さんと同じように障害を持つ星野富弘さんは、このようなことを言いました。「いのちが大切だと思っていたときには、生きることが苦しかった。いのちよりも大切なものがあると知ったとき、生きることが嬉しくなった。」私たちの命は神より与えられた尊いものです。けれども、その命をくださった神、そしてその恵みこそ自分の命よりも優っています。

63:6 ああ、私は床の上であなたを思い出し、夜ふけて私はあなたを思います。63:7 あなたは私の助けでした。御翼の陰で、私は喜び歌います。63:8 私のたましいは、あなたにすぎり、あなたの右の手は、私をささえてくださいます。

主を賛美するだけでなく、思い出す行為をしています。思い出すのは主の御霊がしてくださることです。「ヨハネ 14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」そして、「すぎる」という行為もしています。主が、私たちを右の手で支えてくださっていますが、その主を何としてでもしがみついて離れないという、強い慕い求めです。これは、ルツ記のことを思い出すとよいでしょう。ナオミが嫁のルツとオルパに、自分のモアブ人の家に帰らなさいと強く言いつけて、オルパは戻っていきました。けれども、ルツはナオミに言いました。「あなたの行かれるところへ私も行き、あなたの住まわれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。(ルツ 1:16)」

2B 命を求める者の滅び 9-11

63:9 しかし、私のいのちを求める者らは滅んでしまい、地の深い所に行くでしょう。63:10 彼らは、剣の力に渡され、きつねのえじきとなるのです。63:11 しかし王は、神にあって喜び、神にかけて誓う者は、みな誇ります。偽りを言う者の口は封じられるからです。

¹ <http://www.assistnews.net/Stories/2007/s07020100.htm>

アブシャロム等、彼の命を企てる者のことを話しています。ダビデのこのような祈りを、私たちは何度も目にしました。そして、それが復讐を神に任せるという、積極的な祈りであることを学んでいます。

先月からイスラエル、エルサレムを中心にテロ事件が起こっています。一番酷かったのは、11月18日に起こった、ユダヤ教会堂での超正統派ユダヤ教徒たちの殺害です。祈りのショールや聖書、祈祷書が血まみれになるという凄惨なものでした。私はものすごい復讐劇が始まるだろうと、怖くなりました。けれども、超正統派の人たちの反応は意外でした。悲しんでいるけれども、復讐心はないのです。そして、興味深い報道を見ました。被害者の名前の後に、ある言葉なのですが、「神が復讐して下さいますように」という意味だそうです。そして、それは「犯人に被害があるように」という意味ではなく、「復讐は神に任せる」という意味だそうです。²彼らはその日の内に葬儀を現場で行っており、次の日の朝には同じところで祈りを再開させました。

これが、ダビデの祈りの姿勢なのだと思います。11節には、「王は、神にあつて喜び」とあります。自分が存在しているのは神を喜ぶことであり、それを妨げるものは全て神に任せるという姿勢です。復讐は自分を苦しめます。それは、神への献身を妨げます。主イエスは、「さばいてはいけません、さばかれないためです。」と言われました。さばきは主のもので、そこに手を触れないですべて任せる、この姿勢に私たちの魂が傷を受けることなく、健全に保つことができます。

4A 心に矢を放つ者 64

1B 内なる企み 1-6

64 指揮者のために。ダビデの賛歌 64:1 神よ。私の嘆くとき、その声を聞いてください。恐るべき敵から、私のいのちを守ってください。64:2 悪を行なう者どものはかりごとから、不法を行なう者らの騒ぎから、私をかかまってください。64:3 彼らは、その舌を剣のように、とぎすまし、苦いことばの矢を放っています。64:4 全き人に向けて、隠れた所から射掛け、不意に射て恐れません。

このダビデの嘆きの祈りは、もしかしたらアブシャロムの反逆ではなく、サウルによる暗殺の時のことかもしれません。まだサウルから逃げておらず、殺される陰謀があった時のことです。というのは、ダビデが自分を殺そうとしている者たちがすぐそばにいて、企んでいる声を聞いているからです。ダビデのついで、根拠なき噂がサウルの王宮に広まっていきました。そしてダビデが、そこにいるのが危険な状態になってきたのです。

64:5 彼らは悪事に凝っています。語り合っただけにわなをかけ、「だれに、見破ることができよう。」と言っています。64:6 彼らは不正をたくらみ、「たくらんだ策略がうまくいった。」と言っています。人の内側のものと心とは、深いものです。

² <http://mtolive.blog.fc2.com/blog-entry-1005.html>

敵の悪事が「凝っている」とダビデはしています。悪魔は、私たちに対して策略を持っています。「2コリント2:11 これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」と使徒パウロが言っています。私たちに見破られることのないよう、あの手、この手を使って騙そうとします。私たちの想像しなかった方法で襲ってくるはずですが、ですからイエス様は、「鳩のようにやさしく、蛇のようにさとくありなさい。」と言われました。また、油断しないで、「目を覚ましていなさい。」とも言われました。

そして、そのようにして分からないように巧妙に仕掛けてくることについて、ダビデは、「人の内側のものと心とは、深いものです。」と言っています。そうです、人の心というのは奥深いものです。エレミヤ書に、「17:9 人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」人の心の闇というのは、本人でさえ知ることのできない類いのものであります。

2B 戻ってくる矢 7-10

このように、人の知りえない企みによってこの世の中は動いています。そのため、私たちが純真な信仰を保って生きることを困難にさせます。私たちは常に、いろいろな方法を通して悪霊の放つ火矢が打たれているのです。それによって傷つき、神への信頼を何とかして摘み取ろうとしているわけですが、けれども、人の深い部分を全て知っておられる神は、次のことをしてください。

64:7 しかし神は、矢を彼らに射掛けられるので、彼らは、不意に傷つきましょう。64:8 彼らは、おのれの舌を、みずからのつまずきとしたのです。彼らを見る者はみな、頭を振ってあざけります。64:9 こうして、すべての人は恐れ、神のみわざを告げ知らせ、そのなされたことを悟ります。64:10 正しい者は主にあって喜び、主に身を避けます。心の直ぐな人はみな、誇ることができましよう。

主は、人の行ないに対して報いられる方です。「つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。(2テサロニケ 1:6-7)」神は、人の行なったその通りのことをブーメランのようにして返すことのおできになる方です。不意に射かける者は、不意に射かけられます。口によって人をつまずかせたものは、同じように自分の言ったことによつてつまずきを受けます。

そして、他の人たちが恐れるようになるといいます。つまり、隠れて行なっていることが明るみに出されたということです。パリサイ人や律法学者たちが、イエス様に対して激しい敵対と、いろいろなことでしつこい質問攻めにしました。そこで弟子たちに対してイエス様が、「彼らのパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことだ。」と言われました。表向き、正しいようなことを言い、正しいようなことを行っているのです。けれども、イエス様によって本心にあるものが炙り出されているのです。そこで主が弟子たちに続けて言われました。「おおいかがぶされているもので、現わされな

いものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。(ルカ 12:2)」

いわゆる、「正直者は馬鹿を見る」というようには、神は決してしないということを教えています。主に身を避ける人、主に信頼する人が、ここで言っている心が直ぐな人の意味です。そのような人々が、終わりの日にすべてを振り返って、確かに神を信じていて良かったのだと満足することのできる結末を与えてくださいます。

5A 建てられる神の国 65

そして 65 篇ですが、おそらくダビデの統治の後期であろうと考えられます。アブシャロムの反逆も治まりました。そして、その後ですぐにシェバという男がイスラエルの人たちをそそのかして、ユダからイスラエルを引き離しました。その反逆も鎮圧して、ダビデ王国に安寧が訪れました。ところが、飢饉が三年間続いたのです。安定している所に、なぜこんなことが起こっているのかと思い、ダビデは主に祈ったところ、サウルの時代にギブオン人を殺しているという罪を神が示されました。ギブオン人は昔ヨシュアと盟約を結んでいて、殺してはならないことになっていたのに、サウルが殺していたのです。そこで、その償いのためにダビデが奔走したところ、神は国の祈りを聞かれて、土地を癒されたのです。おそらく、その時にうたった歌ではないかと思われます。

1B 聖なる所にある良き物 1-4

65 指揮者のために。ダビデの賛歌。歌 65:1 神よ。あなたの御前には静けさがあり、シオンには賛美があります。あなたに誓いが果たされますように。

ダビデの姿勢は、若い時から変わっていませんでした。アブシャロムの反逆の時に、彼は沈黙して、主を待ち望んでいました。このように落ち着きを持っている時であっても、ダビデは神の御前で静けさを保っていました。それは、続けて忠実に、主の前に出て賛美を続けているということです。

私は思い出しますが、カルバリーチャペル・コスタメサに戻る時にいつも嬉しかったことがあります。それは、変わらない礼拝であったということです。毎年戻っても、そこにはただ神を心から賛美する姿と、イエス様だけに注目して御言葉だけが解き明かされる姿だけを見ました。もちろん、私たちはマンネリ化、形式化してはいけません。そうではなく、ちょうどいつも変わらぬ愛をもって迎えてくれる両親の実家のように、キリストの変わらぬ愛をもってしっかりと建てられている教会は、私たちの魂に落ち着きを与えます。

65:2 祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。65:3 咎が私を圧倒していません。しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を赦してください。65:4 幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。

これは、おそらく今説明しましたように、飢饉のことがあってまだ悔い改めていなかった罪があり、それを告白して、神が癒してくださった後のことであろうと思われます。ダビデは、「すべての肉」なる者」と告白しています。肉であると言っているのは、「人間にしか過ぎない」という意味です。どんなすぐれた神の人であっても、他の人々と変わらない弱さを持っているということです。そのような脆い者たち、弱い者たちが集まっていて、それで自分たちの罪の重さに圧倒される時があります。けれども、主は憐れみ深くその罪を赦してくださいませ。そうした罪の赦しの上立った集まりが、ここで言っている聖なる宮に集っている者たちです。

そして、「良い物で満ち足りるでしょう」と書かれているのが、この詩篇でのテーマです。神の豊かさに満ちています。まず、神の宮での礼拝において、霊的祝福をもって祝福されている状態です。

2B 地の果てまで広がる御力 5-8

65:5 私たちの救いの神よ。あなたは、恐ろしい事柄をもって、義のうちに私たちに答えられます。あなたは、地のすべての果て果て、遠い大海の、信賴的的です。65:6 あなたは、御力によって山々を堅く建て、力を帯びておられます。65:7 あなたは、海のとどろき、その大波のとどろき、また国々の民の騒ぎを静められます。65:8 地の果て果てに住む者もあなたの数々のしるしを恐れます。あなたは、朝と夕べの起こる所を、高らかに歌うようにされます。

ダビデの賛歌は、聖所の中におけるイスラエルの民から、全世界に移っています。そこには、神の義があるといいます。自然界において神は力をもって働いておられます。そして、国々の騒ぎも神が治められます。海の騒ぎの自然現象もありますが、国々の騒ぎも海の騒ぎのようなもので、それを神は静められるのです。ダニエル書7章に、四つの世界の大国の様子を荒々しい海から出てくる獣として表象しています。けれどもキリストが来られて、神の国をもって静められるのです。そして、地の果てにまで異邦人もが、神を高らかに歌うようになります。

ダビデは今、周囲の国々を平定しているところです。モアブ、エドム、アモン、アラム、そしてペリシテを征服して、反抗することはもはやない状態です。それを見ていて、後に来るキリストの御国が全世界的に同じように平和が広がっている姿を将来の希望の幻の中で見ているのでしょう。

私たちはキリストが地上にまだ戻ってこられていない時に、すべてのものが主に服従している姿を見ていません。唯一、直接的には教会のみがイエスを主として、王としてあがめています。けれども、そのことによって私たちは自分たちだけの集まりにしては決していけません。ダビデは聖所における豊かさを語った後に、全世界に目を向けています。他の詩篇でも、必ず国々、つまりまだ神を知らない人々に神のすばらしさを告げ知らせたり、賛美をしたりしている姿を見ます。つまり、神は全ての上におられるということを私たちは見なければいけない、ということです。つまり、神はいつも宣教の神だということです。

テモテへの手紙第一を読むと、神の救いのご計画についてそのことが鮮やかに出ています。それは、初めに「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。(1:15)」という言葉から始まります。どんな人も、キリストを死に渡されるほど、神は関心を持っておられるということです。ですから、すべての人にキリストを見なくてはいけないのです。神から遠くにいるような人にも、見なければいけません。そして次に、「1テモテ 2:1 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」と言っています。なぜなら、ローマ 12 章 1 節によると、権威と呼ばれているもので神によらないものはないからだ、とあるのです。私たちが、行政を見る時に、政治を見る時に、それがまるで神から遠く離れているように見えるでしょう。しかし、キリストが再臨されれば、それらがすべてその方に服従するのです。そして教会は、キリストにあって祭司であり、また王になるのです。ですから、今から私たちは上の権威の人たちのために執り成して、祈ることによって、与えられている霊的権威を行使するのです。

3B 恵みの耕作 9-13

そしてダビデは最後に、耕作における神の恵みの豊かさのことを賛美します。

65:9 あなたは、地を訪れ、水を注ぎ、これを大いに豊かにされます。神の川は水で満ちています。あなたは、こうして地の下ごしらえをし、彼らの穀物を作ってくださいます。65:10 地のあぜみぞを水で満たし、そのうねをならし、夕立で地を柔らかにし、その生長を祝福されます。65:11 あなたは、その年に、御恵みの冠をかぶらせ、あなたの通られた跡にはあぶらがしたたっています。65:12 荒野の牧場はしたり、もろもろの丘も喜びをまもっています。65:13 牧草地は羊の群れを着、もろもろの谷は穀物をおおいとしています。人々は喜び叫んでいます。まことに、歌を歌っています。

この詩篇は、おそらく秋の祭りの時に歌われたのではないかとされています。先に、自分たちの咎について、罪の赦しを得たことについて歌いましたが、それは贖罪日のことを話しているのではないかといます。贖罪日の時は身を戒めます。断食をして、これまでの罪の清算をさせていただき、そして罪の清めを得ます。それが第七の月の十日にあります。そして十五日から仮庵の祭りが始まります。その時に秋の収穫祭ということで、収穫物を主に捧げるのです。そこで、収穫における神の恵みをほめたたえているのではないかと、言われています。そしてダビデはここでも、終わりの日の幻の中における神の恵みも見つめていることでしょう。エゼキエル書や、その他の預言書に、このように豊かにされたイスラエルの姿が終わりの幻として描かれています(エゼキエル 34:13 など)。そしてゼカリヤ 14 章によると、仮庵の祭りも守られて、世界の諸国もその祭りに参加することが書かれています。

「御恵みの冠」という言葉がいいですね、神の恵みの豊かさを示しています。私たちには、報いとして、いろいろな冠が用意されています。命の冠というものがあります、殉教するスミルナの教会

に用意されました。その死に対して復活の希望で満たしてくださいました。義の冠があります、皇帝ネロによって死刑に処せられる前に彼は自分に義の冠が用意されていることを話しました。自分は世においては有罪に定められますが、神は豊かに義の賜物で満たしてくださいます。そして、ここでは恵みの冠です。たとえ自分が罪を犯しても、それを赦すだけでなく、私たちをご自分の良い物で豊かに施してくださいますとところの恵みであります。

その恵みの中で、丘が喜び、そして人々も喜び叫んでいます。すばらしい光景です。もちろん、丘が喜ぶというのは擬人化しているのですが、それでも贖われた人間と、贖われた土地が調和している姿を表しているのです。けれども、いつか私たちの体も贖われ、そしてこの土地も贖われる時がきます。土地も、まるで踊って喜んでいるかのように神の恵みに満たされるようになり、私たちも神の恵みに見てされていて、調和している姿を将来見ることとなります。

最後に開きたい箇所があります。ピリピ 4 章です。この詩篇と同様のことを教えています。パウロはこの手紙で何度となく、「いつも主にあって喜びなさい。(4:4)」と言いました。そして、こう言いました。「最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。(4:8)」ダビデは、アブシャロムの反逆、またサウルによる暗殺の企みにあいましたが、その悪を主が裁かれることを信じて、主のまえで沈黙し、主を待ち望んでいました。そして、良き物に満たされることに徹しました。そして、こう言いました。「乏しいからこう言うものではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。(4:11-12)」満ち足りているのです。私たちが、信仰によってどんな境遇にあっても、この詩篇にあるように満ち足りる秘訣を知っています。これは、キリストにあってできることです。